

【資料紹介】

平尾魯仙が見た暗門の滝

— 書陵部所蔵「安門瀑布紀行」の成立事情 —

歴史分野 (本田伸・竹村俊哉)

平成二五年度に開館四〇周年を迎える当館では、幕末の津軽画壇に大きな影響を与えた絵師にして、博覧強記を謳われた国学者でもある平尾魯仙(一八〇八〜八〇)に焦点を定め、特別展を実施する予定である。本稿は、その調査で得られた新たな知見を元に行っている。

当館が所蔵する歴史資料に、山形岳泉の筆による「暗門山水観」(以下「当館本」)及び「合浦山水観(西浜)」と題する冊子本(各三冊)がある。江戸時代後期における津軽の景観を描いたもので、前者は山間の西目屋村にある暗門滝とそこに至る道筋の情景が、後者は鱒ヶ沢から深浦に至る津軽領の西海岸一帯が題材となっている。「当館本」にはいずれも奥付に「明治戊申季秋 山形岳泉」とあり、明治四一年(一九〇八)九月の成立を示している。

山形岳泉(太郎九郎、当初の号は泉岳)は弘前藩士の家に生まれた。中畑長四郎『津軽の美術史』(北方新社、一九九二年)によれば、岳泉は師魯仙の作品を忠実に写すことに意をそそぎ、収集した粉本や筆写資料を百冊に区切って、集大成ともいえるべき粉本画帳を残していた、という。事実、魯仙「合浦山水観」初輯(三冊本、弘前市立弘前図書館蔵)を写した岳泉「陸奥勝景道中絵図」(弘前市立博物館蔵)には「于時

明治中模写蒐集百卷製之内十六卷 山形岳泉」の書き込みがある。失われた魯仙作品の復元を試みる上からも、岳泉作品は貴重である。

ところで、平成八年にスタートした青森県史編さん事業の中で、宮内庁書陵部に「安門瀑布紀行」と題された魯仙作品があることが分かった(画帳三冊と解説書一冊の四冊一組。以下「書陵部本」)。調査に当たった青森県史編さん室(現青森県史編さんグループ)が入手した紙焼き写真を見ると、画帳三冊はいずれも「明治九年夏六月改写 六十九翁平尾亮致」の奥付を持ち、それぞれ一八枚、一七枚、一七枚の計五二図が描かれている。この構成が「当館本」と同じであるうえ、「当館本」にない解説書(「安門瀑布紀行 全」の題箋付き)が備わっていることから、「書陵部本」は魯仙の自筆本と見て間違いない。

【書誌】

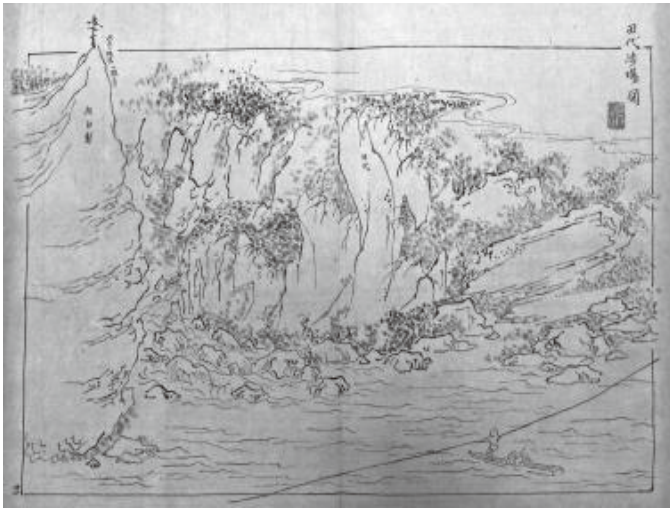
- (1) 資料名 安門瀑布紀行
- (2) 数量 四冊一組
- 画帳 || 「安門瀑布図」 三冊
- 解説書 || 「安門瀑布紀行」一冊 (27丁)
- (3) 所蔵先 宮内庁書陵部
- (4) 区分 普通書
- (5) 請求記号 函号四〇五―一七四

解説書によれば、魯仙は文久二年(一八六二)六月一日から同三日まで、弟子の三上仙年らとともに暗門滝を見に出かけ、各所をスケッチした、という。魯仙は、見分の記憶が新しい

内に清書本を作ることにしており、例えば、安政二年(一八五五)に函館を見分した時もすぐに、「松前紀行」「箱館紀行」「洋夷茗話」などを作成している。西目屋への旅の記録は、六月一七日に完成を見た。ただし、解説書の末尾に「暗門滝はまことに難所で、若いから、健康だからといって、みだりに行ってよい場所ではない」「自分の子や孫は、私の絵を見るだけにして、絶対に行ってはいけない」と書いているから、この時の画帳はあくまでも私家版としてまとめたものであった。

「書陵部本」は明治九年の明治天皇東北巡幸に合せて作られた、とされる。奥付に「改写」とあるように、魯仙は、私家版を再構成して天覧に供したのである。ただし、解説書については、文字の遺漏を追加・訂正した跡が見られることから、清書したのではなく、当初の姿を留めていると考えられる。天覧はあくまで絵画部分のみのことだったようだ。

ところで、弘前市立弘前図書館所蔵の明治二八年十一月十五日付「平尾魯仙安門瀑布図巻同紀行献上添書」(岩見文庫 GK二八九―一七六)を見ると、魯仙の孫に当たる土岐やす・三上不可止が連名で「暗門瀑布図巻三冊・同紀行一冊」の献上を願ひ出、これを受けた宮内大臣土方久元が学習院長近衛篤磨に、献上の旨を明治天皇に奏上してくれるよう申し入れていたようだ。すなわち、「書陵部本」は天覧後も平尾家に留まり、一九年後に改めて献上、という運びになったものと思われる。献上がこの時に実



田代渡場図（当館蔵「雌谷双馬」一） 嘉永6年（1853）
「此上ニ枯木一株有」「惣白磐」「白穴」「十一」

現したとすれば、その後「書陵部本」は一般人の目に触れる機会はなかったわけだから、岳泉は既に写しとってあった粉本画帳か、清書に近い別本（未発見）を元にして、明治四十一年に「当館本」を作成したと見ることができよう。

なお、魯仙の事蹟を顕彰した『平尾魯仙翁』（中村良之進編、昭和四年）によれば、土岐やす（安子とも）は魯仙「四季草花図」三五冊を上野の帝室博物館（現東京国立博物館）に寄贈しており、それらは現存する。ほかに、国会図書館所蔵「新論草藁」一三冊（魯仙の主著「幽府新論」の草稿）も、土岐やすらの寄贈であることが分かっている。

「書陵部本」及び「当館本」との関連では、次の二点が注目される。



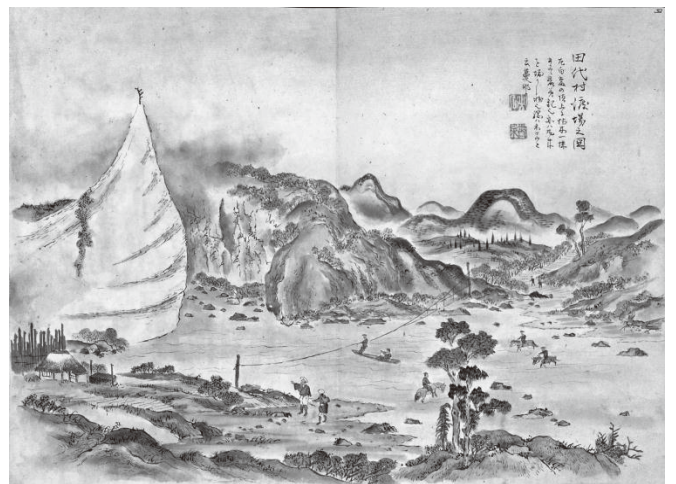
田代渡場（弘前市立弘前図書館「画帳」） 文久2年（1862）
「うっし無用」「改四」

(1) 「雌谷双馬」二冊
平成二二年度に寄贈された成田彦栄コレクションに含まれていたもの（受入番号二一九六一八―七九、八〇）。魯仙が嘉永六年（一八五三）十月に西目屋方面へ出かけた際の画集である（この時は暗門滝を見ていない）。魯仙直筆ではなく岳泉の写しと思われるが、旧蔵者の中村良之進が写した可能性もある。書題の「雌谷」は目屋の、「双馬」は相馬の宛字である。

(2) 「画帳」一冊
弘前市立弘前図書館蔵八木橋文庫（YK七二一―四）。冒頭に「文久二年壬戌年六月朔日発程、二日登山、三日帰着、四日・五日・六日改写」とある。魯仙の直筆と思われる、とこ



田代村渡場之図（書陵部蔵「安門瀑布図」一） 明治9年（1876）
「左白巖の頂上に枯木一株有て最美観也。舟ハ丸木を掘りし物也。網ハネケウと云蔓なり」（写真提供：青森県（県史編さん資料））



田代村渡場之図（当館蔵「暗門山水観」巻） 明治41年（1908）
「左白巖の頂上に枯木一株ありて最美観也。舟ハ丸木を掘りし物也。網ハネケウと云蔓なり」

るどころ、誰かに写し方を指示するような文言が書き込まれている。とすれば、「書陵部本」の構想を練った際、私家版から抜き写ししたものであろうか。

ここでは、比較の一例として、各書から「田代村の渡し場」の部分拾ってみた（前頁）。

江戸時代、岩木川には架橋が許されず、徒渡し・船渡しが主であった。川幅の狭い場所の両岸に綱を渡して船頭が手繰る、という光景は津軽地方では珍しくなかったようで、菅江真澄も「外浜奇勝」（当館蔵）に、十三湖水戸口の渡し

の例を描いている。明治期に橋が架かるようになって、田代の渡しでは旧来の渡し方を続けていたようで、蓑虫山人「岩木川図巻」（個人蔵）には、綱を張った姿の渡し場が描かれている。「書陵部本」の解説書を見ると、

・近くに一〇丈（約三〇メートル）を越える白い尖った岩があり、その頂きに八尺（約二四〇センチ）の木が一本生えている。

・渡し場には三尺（約九〇センチ）ほどの柱が立てられ、長さ二丈（約六メートル）ほどの綱が張られていた。

・綱はネケウ（ニサルナシ。地方名ニキョウウ）という蔓を二つ三つ、継いだものである。

と書かれている。このような魯仙の細かい観察は解説書の随所に盛り込まれており、生き生きとした臨場感を与えている。

また、魯仙の絵画技術を知るうえで重要と思われる表現も、解説書中に見られる。例えば、
……両辺の巖壁は、巍々乎に屹立して中空に進

り、画工のいはゆる、一のは髻頭の皴文を累ね、二のは雲文を畳ミ、三のは斧劈を列ね、ミな赤壁にして、……

とある「皴文」「斧劈」は、魯仙の画論書である『画訣』（弘前市立弘前図書館蔵岩見文庫、G K七二〇―四）にも登場する字句であり、魯仙における南画の強い影響ぶりが見てとれる。なお、『画訣』の内容については、『青森県立郷土館研究紀要』第三六号の資料紹介「平尾魯仙『画訣』と魯仙の作画態度」（本田伸、二〇一年）を参照されたい。

「当館本」について最初に言及したのは、津軽地方の歴史・民俗学研究を通じて魯仙の業績を紹介した故森山泰太郎氏である。「当館本」の旧蔵者であった故八木橋武実氏から資料提供を受けるなどして独自の研究を進め、平成九年（一九九七）からは「西目屋地域生活文化調査委員会」の委員長として、その研究成果を惜しみなく提供した。死後に刊行された調査報告書『砂子瀬・川原平の記憶』（同会編、二〇〇五年）はその集大成で、「当館本」の内容もそこで詳しく紹介されている。

また、近年、菅江真澄・平尾魯仙・津軽民俗の会により『砂子瀬・川原平を歩いた人びと』（山下祐介編、砂子瀬・川原平の生活文化記録集第三号、二〇〇七年）が刊行され、森山氏以降に掘り起こされた資料を盛り込んだ発展的研究が行われている。さらに、山下氏により「書陵部本」の存在が改めて紹介されるなど（例え

ば『白神学』第二巻「白神への道 目屋の古道」、ブナの星白神公社、二〇一一年）、環境学・社会的な面からのアプローチも進んでいる。しかし、内容を把握する上で重要な解説書については部分的にしか触れられていないため、本稿では全文を翻刻することとした。

「平尾魯仙」という講演録にもあるように、森山氏は、魯仙の画業が深い学問的素養に裏づけられたものにとらえ、高く評価した（弘前市立弘前図書館「郷土の先人を語る」シリーズ七、一九七一年）。その氏も「書陵部本」の存在は知らなかったようだが、解説書を目にする機会があれば、より深い考察が可能だったことであろう、と思われる。

魯仙の学問については、『新編弘前市史』や『青森県史』の編纂事業を通じて、研究がようやく深まってきた観がある。魯仙の思想形成に影響を与えた平田国学との関係についても、魯仙と平田家の私塾「気吹舎」との関係書簡が『青森県史資料編 近世 学芸関係』（青森県、二〇〇四年）に収録されるなど、進展を見ている。幕末の津軽国学グループの形成に魯仙が果たした役割は大きく、新たな研究課題として注目されている（例えば、中川和明『平田国学の史的研究』、名著刊行会、二〇一二年など）。

しかし、魯仙の画業については、本格的な悉皆調査が行われておらず、現存する作品数や所蔵先が明確になっていないと言いがたい。弘前市立博物館にまとまった数の魯仙作品があり、津軽地方の寺院・神社にも魯仙の手になる奉納

額などが見られるが、個人蔵のもの、下書レベルのもの、弟子が写したものなども多く、総量の把握は困難である。今後、いっそうの調査を重ねていく必要がある。

「当館本」と「書陵部本」とでは、色遣いや文字の書き込みなど、若干の違いが見られる。文字の異同については、末尾に文字対照表で示した。また、文字の位置を比較したところ、魯仙は画面に文字を書き込む際、全体の構図に配慮して文字の位置や配列（右から書くか左から書くか）を決めていたことが判明した。「当館本」では、空いたスペースに右から左へ文字が書き込まれるだけである。それでも、両者の構図は基本的に同じであるため、本稿では「当館本」の図版を掲載し、参考に供することとした。ただし、誌面の制約上、モノクロ図版となったので、カラー図版については、当館の展示図録『描かれた青森』（当館、一九九九年）や、前出の『砂子瀬・川原平の記憶』『砂子瀬・川原平を歩いた人びと』などを参照されたい。

【例言】

- (1) 魯仙による句読点「・」は、適宜「、」「。」に置き換えた。
- (2) 校訂上の句読点として「・」を追加した。
- (3) 割注の前の句読点は、割注の後に移した。
- (4) 漢字表記は原則として常用体を用いたが、原本の表記をそのまま残した箇所もある。
- (5) 各丁の替わり目は「一」で示した。

（表紙題箋）
「安門瀑布紀行 全」

安門の瀧の道の記

陸奥の吾か津軽の郡の、西の山奥なる安門の瀑布は、音高く響きわたれる名区なれば、年まねく、見まほれとも、行路の、いと／＼峻峻しきよしにて、往見む人も稀なるから、促したつる者もなく、おもひやるへき便も絶て、いたつらに人伝にのミ聞たりしに、茲年文久二年壬戌のとしと云ふに、画の弟子なる、三上ノ仙年に、暴卒にうなかされて、水無月の朔日といふ朝びらきに、誰彼の人等と、九人伴ひ連て発途ける。故そのいゆき渉れる路の序を云むに、先、岩木の川の大橋をうち渡り、駒越、近名、真土の邑々をすぐるに、和やかなる空にしあれば、四方の眺望の艶麗しく、東は大城の高閣より、樋ノ口、悪戸、湯口の邸など、川を境ひて遠近に見えわたり、西は熊嶋、二本木、吉田の邑々、翠わたれる田の面に基布き、岩木の峯は、霞をこめて、高やかに進り立る景況、とり／＼に愛たき眺望なりしに、往かもしらに、龍口、鳥居野、如来瀬の村も打軼り、大久保の邸の頭より、杭人の山に躋らひて、音高かりし、大人の足跟岩とふを尋ね視るに、怪しきかも、奇しきかも、三尺に四尺はかりの岩の面に、一尺四寸はかりの足うらの形、石工の彫れる如く、きわやかに窪みて、指さへまてに見えたりき。偕こを視畢て、とばかり往て、左りに紆りて下れる処は、岩木の川岸なるに、大きき怪しの一岩とも、数まねて布足はし、川のあなだは、吉川、高屋

関根、紙漉沢又はるかに五所の村まで、しむ木立の隈あひより、見えかくれにたつ列るなど、目かれも肯す見もてゆけは、早くも国吉の邑につきぬ。こはこれ雌谷の沢てふ初めの村にて、家の員は十ばかりとおほしきか中に、棟々しきもありて、其かうち酒かひせる家に立ちよそり、汗を洗ひ、酒飲ミ物などたうべ、しまし憩らひて、又進ミ行しに、程なく桜庭の村なりしが、路ゆきぶりの序に、清水の観音堂にまゐてむとて、路の右なる鳥居を潜り、一丁許り往たりしに、たゞ五軒のふせ屋あり。此を清水の村と云とぞ。其が中に庭の端に鐘楼堂建たるは、御仏に仕へまつる家なるへし。こゝより杉の樹とも繁くして立ていと露けかるが、其中に一条の坂路を開き、石櫃を畳みたるを十四・五間も踏りゆくに、左りに小けき祠ありて、かしこくも天照します大御神を祝ひまつり、右に神楽殿を設けたり。又こゝより右に登れば僅の坦地にて、向ふ岸の岨の狭間より、いと潔き水のいさゝか流るゝあり。又御堂は二間に三間なるが、かの坦地をうしろに取なして岨中に建たるなれば、前の柱は六間ばかりも有つらむ。故こを都なる清水寺になぞへて、舞台としもいひしなるべし。すべて此区中は木立ふかく物古りて、いと肅然き地なりき。偕こを視をへて桜庭の邑に立販り、米袋、中野、中畑、と村なみに打過ぎしが、此村々はし、山のとおりに立並ばひて、大川の岸の上なれば、大「路」せきて厳ひ立てる家なく、たゞ片側のミなりしが、川のほとりに田なんと聊見えたりき。かくて行々田代の村に至り、